

澁澤龍彦とアカデミズム：新旧学制の狭間で

倉方，健作

<https://doi.org/10.15017/6779659>

出版情報：言語文化論究. 50, pp.19-32, 2023-03-20. Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

澁澤龍彦とアカデミズム

——新旧学制の狭間で——

倉 方 健 作

本稿は、アカデミズムの外部に身を置いていたと一般に見なされる澁澤龍彦（1928-87）の経歴について、当時の学制からの照射に加えて「日本フランス語フランス文学会」との関係を確認することで再検討を試みる。澁澤の年譜として参照される『澁澤龍彦全集』¹所収「自作年譜」²と巖谷國士による「澁澤龍彦年譜」³の記述も確認しつつ、それらの補足と微修正をも提案したい。

澁澤と東大受験

旧制浦和高等学校を卒業した澁澤は、1948年と1949年の大学受験に失敗し、1950年の3度目の受験で東京大学に合格している。以下は「自作年譜」における記述の抜粋である。

1948年 「三月、東京大学フランス文学科を受験して落ちる。同じ仏文を志望した出口裕弘は合格。文学にのめりこむようになってから、正規の学校の授業を軽んずる習慣がついていたから、あまりショックは感じなかった」。

1949年 「三月、ふたたび東大仏文を受けて落ちる。全く受験勉強をせず、かなり自堕落な生活をしてきたから、どう考えても受かるはずはなかった」。

1950年 「三月、三度目に受けた東大仏文ようやく合格。よく三度も受けたものである。どうして受かったのか、今もって、我ながら不思議である」。

澁澤自身の回想としては他に、「落第」の経験を持つ著名人に対する週刊誌のアンケートへの「入学試験なんてインチキなものだと信用していなかったが、やはり三度目に入ったときはうれしかった」⁴という回答がある。1948年から1950年にかけての3度にわたる大学受験を学制史上に位置づければ、澁澤の経験が持つ意味合いはより明確になる。1950年3月の大学入試は、同月末に最後の卒業生を送り出して廃止される旧制高等学校の既卒生にとって、旧制大学に進学するための最後の機会と見なされていた。大学進学を希望しながら合格に至らない既卒生、いわゆる「浪人生」は、旧制高等学校の卒業生の場合は特に「白線浪人」と呼ばれた（旧制高等学校の角帽に白線があったことに由来する）。「白線浪人」たちは、1950年3月の試験に落ちた場合、実質的に大学進学の道が閉ざされることになっていた。これは旧制大学の入試がこの年度をもって終了し、新制大学入学のためには新制高等学校の卒業生であることが原則となるためである。制度上は進学適性検査を受けて

新制大学を受験することも可能であったが、新制高等学校の学習内容に基づく入学試験に旧制高等学校の卒業者が合格することは非常に困難だったとされる⁵。

学制の転換期に持ち上がった「白線浪人問題」は社会的にも認知されており、1950年3月の試験では「事情を考慮した大学側も、白線浪人救済の意味をこめて例年よりは多めに合格者を出すようにした⁶」という。実際に東京大学も前年度実績の2661名に対して、1950年度の募集枠を2755名へと拡張し、結果的に2853名の入学者を迎えている。澁澤の受験した文学部は志願者988名に対して入学者は410名と倍率は2.4倍であったが、旧制高等学校出身者に限れば志願者668名に対して入学者は359名であり、倍率は1.86倍であった⁷。

なお、前述のとおり、この年の試験に落ちた旧制高等学校卒業生は大学進学の道が事実上閉ざされるはずであったが、翌1951年1月に救済措置として前例のない全国统一試験が実施され、その結果に応じて全国の新制大学の第2・3学年への編入が認められた⁸。この特別措置には教育界から疑問の声もあがったといい、1950年7月27日の『東京大学学生新聞』によれば、ある旧制大学長の一人は「白線浪人は新制高校の卒業生よりも実力がない、殊に語学・数学に関してそうである、こんな実力のない者を無理に大学に入れる必要はない」と述べたという⁹。

「秀才馬鹿」の級友たち

このような学制の転換期を背景として1950年に東京大学に入学した澁澤は、後年、入学当時の状況を「自作年譜」で次のように書いている。

いざ入学してみると、当時はレジスタンス文学と人民戦線理論が大流行で、私の好きなアンドレ・ブルトンがトロツキストの汚名を蒙っていた。級友たちがみんな秀才馬鹿のように見え、つくづく厭気がさして、ほとんど学校へ顔を出さないようになる。研究室の雰囲気も大嫌いで、アカデミーは自分の肌に合わないと感じる。

それでは「秀才馬鹿」のように見えたという級友はどのような顔ぶれだったのだろうか。『東京大学一覽 自昭和十八年度至昭和二十七年』には1952年5月1日現在での「学生生徒氏名」が掲載されており、旧制大学の文学部仏文学科「昭和二十五年四月入学」の項には、澁澤の本名である「澁澤龍雄」を含む46名の名前がある¹⁰。この学年は当該の『東京大学一覽』発行時点で入学から3年目を迎えており、標準的な年限で言えば在学最終年度にあたる。この時点までに退学した学生もあったかもしれないが、狭義での澁澤の「級友」はおおよそ以下のような顔ぶれであった。

| | | | |
|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|
| 伊賀 弘三良 兵庫 | 五十嵐 まつ 千葉 | 池島 和雄 栃木 | 石川 喬司 愛媛 |
| 石田 弘二 静岡 | 石山 彰 静岡 | 板橋 守邦 新潟 | 小里 光 東京 |
| 尾崎 浩 愛知 | 大澤 善武 埼玉 | <u>大竹 健介</u> 東京 | 大沼 作人 宮城 |
| 笠 伊次郎 福岡 | 金子 恵一 長野 | <u>菅野 昭正</u> 埼玉 | 喜多 迅鷹 佐賀 |
| 金 太 中 朝鮮 | 窪川 健造 静岡 | <u>佐藤 昭夫</u> 福島 | <u>佐藤 巖</u> 岡山 |
| 佐藤 勇一 新潟 | <u>澁澤 龍雄</u> 埼玉 | 住谷 春也 群馬 | 田中 将 広島 |
| <u>田中 仁彦</u> 東京 | 高木 良男 香川 | <u>竹下 令子</u> 京都 | <u>中澤 俊郎</u> 宮城 |
| 中島 達夫 広島 | 中山 泰三 東京 | <u>野澤 協</u> 東京 | 葉田 正雄 徳島 |

| | | | | | | | |
|--------|-----|-------|-----|-------|----|-------|----|
| 萩原 嗣郎 | 岡山 | 藤居 英世 | 北海道 | 三輪 秀彦 | 愛知 | 村上 光彦 | 群馬 |
| 森 正 | 北海道 | 安間 中 | 静岡 | 柳瀬 義和 | 愛知 | 山崎 正巳 | 東京 |
| 山崎 庸一郎 | 佐賀 | 山本 潔 | 福岡 | 湯浅 赳男 | 山口 | 米村 晰 | 石川 |
| 渡邊 香根夫 | 高知 | 渡邊 廣士 | 佐賀 | | | | |

下線で示したのは、卒業後に「日本フランス語フランス文学会」への入会が確認された「級友たち」である。その大半は大学に職を得ており、したがって澁澤も同様のコースを辿る可能性が十分にあったことを示している¹¹。フランス文学以外の分野で研究者の道に進んだ者も含め、彼ら「級友たち」の専攻や研究対象の一端が、後年の澁澤の興味の対象と重なっている点を指摘しておきたい。一例を挙げれば、三輪秀彦にはアンドレ・モーロワ『幻想論』、モーリス・ブランショ『死の宣告』をはじめとした多数の翻訳があり、自ら小説・評論も書いている。村上光彦もマルセル・ブリヨンの翻訳者としての活動のほか、エジプト神話の概説書を執筆し、後年には『鎌倉幻想行』（朝日新聞社、1986年）、『イニシエーションの旅 マルセル・ブリヨンの幻想小説』（未知谷、2010年）など「幻想」への方向性を強めていった。またルーマニア文学者の住谷春也は『エリアーデ幻想小説全集』（全3巻、作品社、2003-05年）の訳者として知られる。浦和高等学校以来の友人である野沢協を別にすれば、澁澤が在学中あるいは卒業後にこれらの「級友たち」と親しく交流し、興味を共有した形跡はない。それにも関わらず彼らの活動や業績がとりわけ1970年代以降に同調する理由は、日本国外から流入する文学・思想の潮流や出版界の傾向など、より広い意味での同時代性に求められるように思われる。こうした仮説の検証は本論の射程を大きく超えるが、世代や時代性を踏まえた上で澁澤の著作を相対化する作業は不可欠となろう。

澁澤「自作年譜」における「当時はレジスタンス文学と人民戦線理論が大流行で、私の好きなアンドレ・ブルトンはトロツキストの汚名を蒙っていた」という箇所は、当時の学生の問題意識に政治が占める部分が小さくなかったことを示唆している。上掲の1950年度の仏文学科入学者のなかには、のちの『赤旗』特派員や労働運動活動家もおり、その思想的萌芽が高校・大学時代に既にあったであろうことは容易に想像される。こうした政治性をとりわけ発揮していた「級友」は野沢であった。以下は、同じく「級友」の渡辺香根男が野沢の追悼文集に寄せた回想である。

私が野沢協と知り合ったのは、昭和二五（一九五〇）年四月、東京大学（旧制）文学部仏文学科に入学して間もなくである。戦後の学生運動が反米色を濃厚に昂揚していた時期で、キャンパスには立て看板が林立し、休み時間には全学連のリーダーがメガフォンでアジ演説をぶっていた。経済的な逼塞感があったが、夜明け前の明るさ自体はむしろ生き生きと耀っており、私もふくめて一般学生の間には政治的なものに対する端からの無関心はなかった。細かいニュアンスは刈り込んで言うなら、戦前・戦中・戦後を一貫して反戦・反権力の信条をもっともラディカルに貫徹した唯一の政党として、日本共産党の前衛主義が知識人の間に占める象徴的地位は圧倒的といってよいほどのものであったと思う。

そんな時代のキャンパスのオルグとして故人は仏文の目立った存在だった。たしか渡辺一夫教授の「フランス・ルネサンス研究」であったか、講義の始まるまでの十分間ほどの空き時間を利用して、朝鮮戦争反対を訴える彼の口調が甦ってくる。いわゆるアジ演説だが、〈煽動〉というよりそれはいつも諄諄たる〈説得〉の趣を呈していた。叫喚にはほど遠い謐かな白熱という印象があった。講義を始めようと制止する教授と揉みあうような恰好になることもあったが、

その残像はいつもパントマイムを見るような静謐感に包まれている¹²。

同追悼文集には「先生が、学生時代の思い出として、ある日教室で、渡辺一夫先生に議論の末つかみ掛り、取っ組み合いになり、二人で床の上を転げまわったことがあったと話されたときだけはびっくりした¹³」という証言もあり、渡辺が語る「講義を始めようと制止する教授と揉みあうような格好」は、実際には「揉みあう」という表現よりも激しいものであったらしい。これに比べれば、友人たちの回想で語られる青年期の澁澤の政治性の発露は遥かに微温的である。野沢のこのような政治性を前には、大学内で中途半端に政治運動に加担することはかえって難しかったのではないだろうか。

「秀才馬鹿」に立ち返れば、この表現が新制大学の入学者を指しているわけではないことには留意したい。旧制大学が最後の入学者を迎えた一方で、新制大学も前年度の1949年度から学生の募集を開始していた。したがって1949年、1950年の2年間は、学制変更の過渡期として、旧制大学と新制大学がそれぞれに入学試験をおこない、新入生を迎えている。1949年度から新制の東京大学も新入生を迎えていたが、彼らは駒場に新設された教養学部で最初の2年間を過ごすため、本郷で3年間を過ごす旧制大学の入学者と顔を合わせることはなかった。ひとくちに東大出身と言っても、この時期の入学者は3年制の旧制大学と4年制の新制大学の違いによってかなり環境が異なる。以下に簡略的な表を作成した¹⁴。

旧制・新制両立期の東京大学入学者の在学年度

| | | 1948 年度 | 1949 年度 | 1950 年度 | 1951 年度 | 1952 年度 | 1953 年度 | 1954 年度 |
|--|--------------------------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|
| 旧制大学 (3年制) 3年とも本郷 | 1948年入学 出口裕弘 | 1年 | 2年 | 3年 | | | | |
| | 1949年入学 菅野昭正、 辻邦生 | | 1年 | 2年 | 3年 | | | |
| | 1950年入学 澁澤龍彦、 菅野昭正(再入学)、野沢協 | | | 1年 | 2年 | 3年 | | |
| 新制大学 (4年制) 2年まで駒場 教養学科を除き 3年から本郷 | 1949年入学 | | 1年 駒場 | 2年 駒場 | 3年 | 4年 | | |
| | 1950年入学 | | | 1年 駒場 | 2年 駒場 | 3年 | 4年 | |
| | 1951年入学 種村季弘、松山 俊太郎 | | | | 1年 駒場 | 2年 駒場 | 3年 | 4年 |

したがって入学直後の澁澤の「級友たち」から新制大学生たちは除外されるが、同じ授業を受けていたであろう旧制大学の上級生が含まれる可能性はある。澁澤の前年度、1949年4月に仏文学科に入学した学生に辻邦生がおり、辻は「思えば、私の同級には二宮夫妻[二宮敬、二宮(横田)フサ]、大久保輝臣、滝田文彦のほか菅野昭正、栗津則雄、栗田勇、小林善彦、福井芳男、鈴木道彦、森本和夫、山路昭などなかなかの顔ぶれが並んでいた」と回想している¹⁵。このうち二宮敬、菅野昭正、滝田文彦、小林善彦、福井芳男、森本和夫のちに東京大学教授となっている。翌年度の入学者と比較した場合、少なくとも肩書きの上で「なかなかの顔ぶれ」であることは間違いなく、やがて「アカデミー」の一員となる彼ら広義の「級友たち」に、当時の澁澤が「秀才馬鹿」という印象を受けたとしても不思議ではない。

澁澤と「旧制」大学院

東京大学入学後の澁澤は、留年することなく、旧制大学の一般的な修業年限3年間を経た1953年3月に卒業している。生田耕作はこの卒業の経緯に絡めた文章を1970年に書いているが、そこでは澁澤の容貌と姿勢が褒め称えられ、対置される「大学の教師連」は悪罵の対象となっている。

[略] 同じフランス文学研究者でも、大学の教師連のあの老けようはどうだ。澁澤さんは、その点、眼が効いたね。大学の卒業論文にサドをたたきつけて、お古い先生方のド肝を抜き、あっさりアカデミーと絶縁してしまったんだからね。[中略] 君らが学校で習っているフランス文学なんて、はっきり言って、なんの価値もない、紙くずみたいなもんさ。それに今もって後生大事にしがみついているのが大学の「文学部」というところだよ。澁澤さんは、そういうものをいっきょに色褪せさせた先覚者だよ¹⁶。

架空の人物の対話という形式を考慮すれば、この文章を京都大学教養部の教授であった生田の本音、あるいはルサンチマンと読む必要はない。澁澤の愛読者の心象をデフォルメしたものと捉えれば、「アカデミー」の揶揄であると同時に、澁澤という存在に一種の理想を投影する在野研究者の戯画ともなりうる。そのような文章を真面目にとり、生田の書く通りに澁澤は卒業論文を本当に「たたきつけ」たのか、あるいは「お古い先生方」は実際に「ド肝を抜」かれたのか、また澁澤が「あっさりアカデミーと絶縁した」というのは真実だろうか、といった問題をあえて提起するのは過剰反応にも見えようが、以下に一応の検証を試みる。

卒業論文の提出に関して、澁澤自身の回想は思いのほか穏当である。「自作年譜」では1953年の項に「三月、東大を卒業。卒業論文は「サドの現代性」というタイトル。鈴木信太郎先生から、もう少し論文らしく整理して書かなければいけません」とたしなめられる」とある。また1955年刊行のサド『恋の駆引』の巻末解説には「訳者が東大の卒論の題目にサドを選んで諸先生並びに諸僚友を苦笑せしめたのは、左様いままから三年ばかり前のことになるが¹⁷」と書かれている。この文章の末尾には「一九五五年薫風の候」とあり、「三年ばかり前」の1952年初夏に卒論の題目届が提出されたことを示している¹⁸。したがってサドを卒業論文とすること自体は、題目届の提出によって事前に教授陣も把握していたのであり、不意の一撃をくらわせたかのような「たたきつけ」という表現は実情にはそぐわない。

また、はたして「お古い先生方」にとって、サドは未知の作家、少なくとも卒業論文に取り上げることあり得ない作家だったのだろうか。確かに、澁澤の大学入学とほぼ同時期に刊行された東大フランス文学会編『フランス文学辞典』（全国書房、1950年）には「サド」の項目は存在しない。だが、澁澤の卒業論文の審査を担当した鈴木信太郎・渡辺一夫の両教授にとってサドが未知の作家であったとは考え難い。『獨協大学所蔵 鈴木信太郎文庫目録』（獨協大学図書館、1997年）によれば、鈴木信太郎の旧蔵書には戦前に刊行された3冊のサドの原書があり¹⁹、渡辺一夫は、サドへの直接の言及はないものの、同時代の作家であるカゾットの作品を1948年に平岡昇との共訳で刊行している²⁰。1956年に澁澤は「いかなる文学史の頁にもその席を与えられていないサドは、何という名誉を担って今日に生きていることか。（尤も最近邦訳されたクセジュ版の『十八世紀文学』には「恥ずべき三人」としてレチフ、サド、ラクロの名が載ってはいるが。）」²¹と書いている。ここで言及されている邦訳とはソーニエ著『十八世紀フランス文学』（山田稔、中川久定、田村徹共訳、白水

社、「文庫クセジュ」、1956年）だが、原書は1943年に刊行されており²²、鈴木の蔵書には1948年に刊行された第2版が見られる²³。こうした状況から判断すれば、題目届を見た「お古い先生方」の反応は、確かに卒業論文としては珍しい対象だとは思ったとしても「ド肝を抜」かれたとまでは行かなかったというのが真相に近いのではないか。

卒業論文提出後に「あっさりアカデミーと絶縁した」というのも正確ではない。澁澤自身は「自作年譜」で言及していないが、大学卒業後に東京大学大学院に進学しているためである。巖谷國士による年譜では「[1953年]四月、東大文学部大学院に進むが、講義にはほとんど出席しなかったらしい」とあるほか、『新潮日本文学アルバム 澁澤龍彦』には澁澤自身の学生証の写真も収録されている²⁴。ただし、澁澤の大学院進学が「アカデミーとの絶縁」を意味しないとしても、だからといって直ちに「アカデミー」への帰属には結びつかない。学生証にも見られるように、澁澤が1953年4月に進学したのは「旧制」の大学院であった。1953年度は1950年に旧制高等学校から3年制の旧制大学に進学した最後の学年の最終年度であると同時に、1949年に4年制の新制大学に入学した最初の学年の最終年度でもある。このため、旧制大学院の最後の募集と、新制大学院の最初の募集が併存した。『東京大学百年史』によれば「新制大学院の第一回入学者と旧制大学院の入学者、在学者が併存したため、一時期は、新旧両制度の大学院学生が同じ研究室に所属するという事態もおこり、同期に進学しても、一方は新制度の修士課程学生が特論、演習といった、時間割に従ったスクーリングに追われるのに対し、他方の旧制の学生は特に時間的拘束なしに研究をすすめていた」「文化系学部ではほとんど大学に来ない者もあった」²⁵という。巖谷國士による年譜の記述から判断すれば、澁澤は明らかに後者に該当する。

澁澤と同じく1953年4月に東京大学の旧制大学院に入学した学生の総数は499名だが、そのうち220名が文学部であった²⁶。旧制大学院には入学試験がなく、指導教員の許可によって進学が可能であったため、人数が膨れ上がったものと考えられる。それに対して新制大学院への入学には試験を経る必要があり、1953年度の新制大学院入試では「人文科学研究科仏語仏文学専攻」は、入学定員6に対して入学試験者が18、試験の結果11人が入学を許可されている²⁷。また先の引用で見た通り、新制大学院では教員養成という目的のもとでカリキュラムが組まれていた。「新制」高校で学び、受験を経て「新制」大学に入学した俊英がさらに選抜され、続々と「新制」大学院で学問と向き合う一方、存続期限が定められた「旧制」大学院は「アカデミー」への道筋としては立場を急激に弱めていったものと考えられる²⁸。澁澤が大学院を退学した時期は定かではないが、前述の学生証では、昭和28年度から3年分が用意されている「身体検査受験印欄」「授業料納入印欄」のいずれも、印を押された形跡がない。退学が入学後まもなくであった可能性は高い。

澁澤が新制大学および新制大学院に対してどのような思いを抱いていたかは定かではないが、少なくとも数年後の東京大学仏文学科の雰囲気、自身の在学時代のそれと大きく異なるとは感じていたようだ。『新潮』1958年11月号に掲載された江藤淳、篠田一士との鼎談「大江健三郎の文学」では、大江の作品の背景として「僕は実際を知らないけれども、あれが伝統的な東大仏文の空気ですか」と篠田に聞かれた澁澤は「いや結局新制大学になったり、渡辺一夫先生が主任になったりしてからのものでしょう」と答えている²⁹。1954年4月に東京大学に入学した大江は1956年4月に仏文学科に進学しており、この年は鈴木信太郎の退官直後、渡辺一夫が教授陣の最年長者となった最初の年にあたる。当時、東大仏文に進学することはすなわち渡辺一夫に学ぶことであるという空気が、少なくとも学生の一部によって共有していたことは大江自身が回想している。

[...] いまから二十七年前のある日、四月の、銀杏の新芽が出てきはじめて頃の一日、本郷の薄暗い教室に坐って先生の到来を待ちうけておりました。その時僕は二十一歳でしたが、渡辺一夫という先生が、はじめてわれわれのクラスで講義をする、という日だったのです。フランスの中世語の文法の時間でした。その教室で学んだ文法はまったく僕の人生の役には立っておりませんが（笑い）。そんなことははじめからわかっていたのに、当の先生の講義を聞こうと、緊張して待っている学生たちが、教室にはいっぱい詰まっていました。そして、そこで待っていた学生たちは、みんな渡辺一夫という学者の文章を、とくに岩波新書の、いまはもう絶版になっておりますが、『フランス・ルネサンス断章』によって十六、七歳の時に読み、感銘を受けていたのです。僕のクラスの友人たちは、文学についてたいい同じような経験をしていました。まず新制高校の一年の時に、小林秀雄の最初の全集が出たものですから、それを読んで小林秀雄という人間と、東大仏文の関係に眼を向ける。ついでそこの代表的な学者に渡辺一夫という人がいるのを知って、先生の本を読む。それから先生に教わろうと発心する。まったく同じ経験をした人間が、いま思い出すだけでも幾人か、そしてさらに多くがまだ子供のような顔かたちで待ちうけていたのです³⁰。

制度の違いばかりでなく、教員と学生が形成する研究室の雰囲気の変化は、澁澤の精神上における東京大学および「アカデミー」への帰属意識に影響したことは想像に難くない³¹。

「日本フランス語フランス文学会」会員としての澁澤龍彦

それでは旧制大学院を退学した澁澤は、今度こそ「アカデミーと絶縁」したのだろうか。澁澤がこの時期に「日本フランス文学会」に入会している事実は、これまであまり重要視されてこなかったようだ。大学院進学から2年後の1955年3月頃を指して、巖谷國士による年譜は「このころ、日本フランス語フランス文学会に入会したらしい」と書いているが³²、1955年6月発行の日本フランス文学会の学会誌『フランス文学研究』の巻末、「新入会員」の「追加」の欄に「渋沢龍彦 昭28 鎌倉市小町140」という記載がある³³。本名ではなく、前年のコクトー『大勝びらき』の翻訳の際に初めて用いた筆名で入会しており、職業欄は空白となっているため、この時点で大学院に学籍はないことは明らかである。入会以降、澁澤は会員としての身分を10年以上にわたって更新した。1962年の「サド裁判」における被告人特別尋問でも、所属団体を聞かれた際に「日本文芸家協会の会員ですし、それからフランス文学会の会員になっております」³⁴と答えているほか、1965年5月発行の日本フランス語フランス文学会『会員名簿』（「1965年5月1日現在」で編集されている）にも、会員として「渋沢竜彦 東・昭28 著述業 鎌倉市山ノ内311 (2) 8270」という記載がある。これは1952年頃に会員となった出口裕弘が、この時点で既に退会していることと比べても興味深い事実と言えよう³⁵。

確認した限り、澁澤の学会発表や学会誌への寄稿、学会役員への就任等の形跡は一切なく、おそらくは学会の全国大会にも出席しなかったものと考えられる。『全集』の年譜には、1957年6月に「仏文学会のために上京した片山正樹、生田耕作と、高田馬場のレストラン大都会で会う」とあるが、この年は6月8日・9日に都立大学で日本フランス文学会全国大会が開かれている³⁶。その前年6月初旬にも「片山正樹が来宅」とあるが、これも6月2日・3日に学習院大学で開かれた同大会に合わせて片山が上京したもののだろう。大会の主催校から離れた場所での会食や澁澤家への「来

宅」は、澁澤自身は大会に出向かなかったであろうことを示唆する。

それでは大学院を退学した澁澤が、なぜ1955年になって「日本フランス文学会」に入会したのだろうか。その動機は定かではないが、澁澤の入会の背景に、日本フランス語フランス文学会編『フランス文学辞典』（白水社、1974年9月5日発行）が関係しているという仮説をここで提示したい。会員が専門に応じて各項目を執筆する同書への参加のために、澁澤が当時の「日本フランス文学会」に入会した、あるいは入会を委嘱されたのではないだろうか。澁澤はこの『フランス文学辞典』において「サド」「ジュスチヌあるいは美德の不幸」「ジュリエット物語あるいは悪徳の栄え」の3項目を執筆している³⁷。これらは『全集』に収録されていないが、同全集には『世界大百科事典』『大百科事典』『万有百科大事典』への項目執筆は収録されており、編集方針を確認しても排除する理由は見当たらない。『全集』に付された「著作年譜」「書誌」にも記載がないことから遺漏と判断される³⁸。

『フランス文学辞典』の刊行は1974年だが、巻頭の「編集責任者のことば」によれば、企画は1954年春に白水社から辰野隆・鈴木信太郎・渡辺一夫の三氏のもとに持ち込まれ、同年秋の「日本フランス文学会」の総会において、編集刊行を学会が引き受けることが提案・可決された。その後直ちに編集委員が選ばれ、「できるだけ広範囲の会員にそれぞれの専門に応じて執筆をお願いすることにした」というのが成立の経緯である。「項目については、まず、ランソン、ベディエ＝アザールの一般文学史、チボーデの近代文学史、ラルー、クルワール、ジラルール等の現代文学史に名前があがっている作家、作品、作中人物、ジャンル、詩型、フランス文学に顕著な影響を及ぼした外国の作家・作品等をカードに取り、その中から編集実行委員が協議・選択して項目を決定した」とあり、この過程のなかで、サド関連の項目も決定されたものだろう。その担当者としてサドを卒論の対象とした澁澤の名が挙がり、執筆依頼とともに入会の勧誘が来たと考えれば、1955年3月頃の日本フランス文学会への入会とも符合する。『フランス文学辞典』で18世紀の項目を担当する編集委員は5名いたが、そのうち実行委員をつとめていたのは澁澤にとって浦和高等学校での旧師にあたる平岡昇であり、また野沢協も編集委員であったことも、この仮説を補強する事実となる³⁹。

ただし、実際の執筆がいつなされたのか、また項目が厳密に澁澤のみによる執筆であるのかどうかといった点については、より詳細な検討を要する。1954年に始まった『フランス文学辞典』の編集は大幅に遅延し、刊行まで20年を要した。執筆時期の特定には、1959年に発表された「マルキ・ド・サド略歴」⁴⁰や、1965年の『世界大百科事典』以降の「サド」の項目の変遷⁴¹、さらには1967年の『サド研究』にまとめられる『マルキ・ド・サド選集』における作品解説⁴²などとの用語の比較や、使用したと思われる仏語文献との照合が必要となるだろう。

第三者による加筆の可能性も排除できない。1962年11月10日に開かれた「日本フランス語フランス文学会」の幹事会では「フランス文学辞典の刊行遅延にともなう訂正加筆の必要について論議」され、翌日の評議員会で「『フランス文学辞典』訂正加筆の件につき、小林正氏より白水社の事情を説明」し、12月1日の在京評議員、幹事合同会議において「19世紀以前の加筆・訂正は従来の運営委員会に委ね、20世紀の加筆・訂正は関東支部に委ねることに結論、「辞典」の全体の責任者を小場瀬卓三氏、連絡係を小林正氏とすることに決定」とした経緯が当時の学会誌に掲載されている⁴³。こうした加筆・訂正について前述の「編集責任者のことば」には「記述の仕方ができるだけ統一されていたほうがよいので、原稿には編集実行委員の手でかなり自由に加筆させてもらった。単なる字句の訂正加筆にとどまらず、実行委員自身、または他の専門家に依頼して、大幅な加筆をした場合もあり、その場合は加筆者にも責任を分担してもらい意味で、その名前を併記した」とある。ま

た「完成した原稿が編集実行委員のもとに揃ったのは1964年である。発足後すでに10年がたち、現代文学の領域で没した作家が出てくるのは当然としても、さらに新しい作家が生まれ、作品は毎年増えてゆくので、取りあげるべきものを補ったほか、過去の大作家についても新しい重要な研究や校訂本が出版されたり、解釈に新しい見方が出て来たりした場合は、実行委員がこれを補正した。最終校の段階まで可能な限り補筆を怠らなかったが、基本的には1970年ごろまでの研究によって原稿が書かれていると諒解されたい」ともあり、とりわけフランス本国で研究が急速に進んでいたサドに関する原稿に加筆・訂正がなされた可能性は高い。とはいえ完成した項目はすべて澁澤の単独署名であり、全著作中でもっとも「アカデミー」に近い場所で発表された文章として特筆すべきものがある。

ところで、澁澤自身が「サド裁判」の際に、自身が当時の「日本フランス文学会」の会員であると明言したことは先に述べたが、当時の学会誌を見ても、「日本フランス文学会」が裁判に対して声明を出した形跡は確認できなかった。1988年刊行の『フランス語フランス文学研究別冊 学会25年のあゆみ』にも記載はない。学会に声明を出す機構が備わっていなかったわけではなく、1960年6月には安保反対・国会解散要求の声明を出しているほか、1969年には「安東次男教授に対する辞職勧告の撤回を求める学会決議」、その後も1973年には筑波大学法案反対声明、1974年には大学再編の動きに対するための決議などがあった⁴⁴。「サド裁判」に関して動議がなかったのだとすれば、当時のサドおよび澁澤に対する学会の等閑視と、裁判の世間的な反響との大きな乖離を示すものとして興味深い。

結びにかえて：旧制・新制の意識差

本稿では中学から大学・大学院に至る澁澤の学歴と、その後の「アカデミー」との関わりを見てきたが、とりわけ大学入学の経緯がもたらした影響について、種村季弘はひとつの仮説を立てている。

出口 この人 [=澁澤] は西洋、西洋でやってきたのに、向こうの理論的なものにはカブレなかったね。

種村 そうそう。それは浪人したせいだと思う。

出口 え？ どういうこと？

種村 二年浪人してるんでしょ。そうすると入ったときには年下のヤツが同級生にいるわけだよ。そういう旧制高校からストレートに入っちゃったっていうのは、当時の支配的なディスクリール、高校時代のイデオロギーってものをそのまま優等生的に大学でも発展させちゃうでしょ。

出口 うん。うん。

種村 で、僕は、人民戦線であろうがマルクス主義であろうがマラルメであろうが、同じだと思っただけど、あの人はマラルメとかヴァレリーってことは言わなかった人でしょ。フランスの一種の制度的な中心主義みたいなものに興味がないわけでしょ。初期に入れ揚げたコクトーなんてのも、どっちかっていうとやはりスペイン・ゴンゴラですね。

出口 ゴンゴリスモだね。

種村 それからブルトンみみたいな北方神秘主義とか、ランボーみたいにオリエントに行っちゃうとか、興味をもつのはそういう外を向いている人たちでしょ。中心にいるものに興味をもた

ないというのは、やっぱりドッペッタからですね (笑)⁴⁵。

この会話が世代論として機能するのは、種村が言及する「そういう旧制高校からストレートに入った」学生に、対談の相手である出口も含まれるためである。前出の表で示したとおり、種村は澁澤入学の翌年に「新制」東京大学に入学しており、旧制高校を経てもいない。澁澤が後年親交を結ぶ松山俊太郎も種村と同期の入学だが、わずか1年の差に過ぎなくとも新旧学制の間には明確な一線が画されている。それぞれの仕方でも澁澤の同輩を任じながらも、知識や思考、人脈を形成する学歴においては、澁澤と彼らの間にはそれぞれに小さくない隔りがあった。自分自身が「アカデミー」に手が届くか否かという意識、また実際に「アカデミー」に身を置く友人たちとの交流などはその最たるものだろう。新旧学制の狭間にあった澁澤は、とりわけアカデミズムに対して敏感にならざるをえず、それが彼の立ち位置の独自性を形成する一助ともなったとも考えられる。

*本稿は JSPS 科研費 JP22K00343 の助成を受けている。

注

- 1 『澁澤龍彦全集』全22巻、別巻2、河出書房新社、1993-1995年。以降本論文では『全集』と略記し巻号とページ数を付す。
- 2 『全集』12巻、584-593頁。『別冊新評』1973年秋号初出ののち、著者の生前に複数回にわたり各種雑誌・特集号に再録された。
- 3 『全集』別巻2、445-554頁。
- 4 『週刊朝日』1974年2月8日号のアンケート「われら“落第体験派、全員集合”への回答。『全集』別巻1、389頁。
- 5 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史 通史二』東京大学出版会、1985年、1003頁。1949年度の新制東京大学第一回入学者1804名のうち「旧制高校卒業生・大学予科三年修了者」は6名に留まる。大部分(1347名)を占めるのは「旧制高校及大学予科一・二年修了者」だが、これは1948年に旧制高等学校に入学した者は1年修了後に新制大学を受験することが可能となる過渡的措置によるものである(東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史 通史三』東京大学出版会、1986年、168頁)。
- 6 佐々木享「大学入試の歴史(6) 白線浪人問題の結末」、『大学進学研究』8巻1号、1986年5月、52-56頁。
- 7 前掲『東京大学百年史 通史二』、1010頁。
- 8 この通称「白線入試」は1951年1月12日、13日に旧制高校卒業生のみを対象として全国5ヶ所で行われ、この結果東京大学においても計731名(うち文学部81名、医学部は編入学試験を行わず)が編入学を認められた。同上、1009-1011頁。
- 9 同上、1011頁。
- 10 関連する法令や規則、組織図、職員・学生の名簿などを記載した『東京帝国大学一覧』は、1942年まではほぼ毎年発行されていたが、戦後の『東京大学一覧』は「自昭和十八年度至昭和二十七年」が最初の発行となる。次の発行は「自昭和三十年度至昭和三十三年度」であり、6年の間があいている。前者の学生一覧は1952年5月1日現在、後者は1958年5月1日現在のものでは

あるため、その間の移動については明らかではない。

- 11 「級友たち」の就職状況は日本フランス語フランス文学会『会員名簿』（1965年5月）を参照した。なお澁澤自身も1959年2月3日の書簡で「君が東洋大学を振るなら、僕に行かせてくれよ」と出口裕弘に書き送るなど、少なくとも一時期は大学教員となる希望を持っていたらしい（出口裕弘『澁澤龍彦の手紙』朝日新聞社、1997年、100頁）。
- 12 渡辺香根男「謎かなる残像——野沢協の思い出——」、野沢協遺稿集刊行委員会編『回想 野沢協』、法政大学出版局、非売品、2018年11月、119-120頁。
- 13 浜崎設夫「野沢協先生を偲んで」、同上、85頁。
- 14 『東京大学一覧 自昭和十八年度至昭和二十七年』および『「駒場祭三十周年の会」記念誌 付・東京大学教養学部昭和二十四・五年入学者名簿』（非売品、1979年11月24日発行）を参照して作成。各入学年度の横には本稿に登場する数名の名を挙げた。1949年に社会学科に入学した菅野が翌年フランス文学科に再入学するに至る状況、その間の澁澤との交流については菅野昭正『明日への回想』（筑摩書房、2009年）101-109頁に詳述されている。網掛けは澁澤と教室で同じ授業を受けた可能性のある学年を指すが、あくまでもこれは入学年度から導かれる学年上の「理論値」であり、留年や転科などの可能性は排除されている。したがって個々の人物との関係は精査される必要がある。なお澁澤の妹・道子も1952年に新制東京大学に入学しており、その年度は兄妹ともに「東大生」であったが上述のとおりキャンパスは異なっている。
- 15 辻邦生「旅のはじまり そして友人たち」、辻邦生編『フランスわが旅』、中央公論社、1977年、20-21頁。上述のとおり実際には菅野の仏文学科入学は辻の翌年である。
- 16 生田耕作「童心の碩学」、『澁澤龍彦集成 第5巻』（桃源社、1970年）月報。河出書房新社編集部編『澁澤龍彦をめぐるエッセイ集成 I』（河出書房新社、1998年）に再録。
- 17 「マルキ・ド・サドについて」、サド『恋の駁引』（河出書房、1955年）巻末解説。『全集』1巻、287頁。
- 18 同じく1952年度に卒業論文を提出した菅野昭正は「実物の提出はだいたい先の十二月二十五日だが、題目を明記した提出予定届を出す期限は六月である」と回想している。前掲『明日への回想』、177頁。
- 19 書誌情報は以下のとおり。*Ernestine*, J. Fort, 1926 ; *Historiettes, contes et fabliaux*, S. Kra, 1927 ; *L'Œuvre du marquis de Sade*, Bibliothèque des Curieux, 1909. 目録の「まえがき」によれば「これらの蔵書の大部分は、大正末期から第二次大戦で外国書が買えなくなる時期までの十余年のあいだに蒐集された」という。
- 20 ジャック・カゾット『悪魔の恋』渡辺一夫・平岡昇共訳、逍遙書院、1948年（のち国書刊行会「世界幻想文学大系」で再刊）。戦後の数年間にラクロ、サド、クレビヨン・フィスをはじめとする18世紀文学の訳書が集中して刊行されたが、これは翻訳権をめぐる問題で新刊書の翻訳が困難になった過渡期に、出版界の目が未訳の古典作品に向いたことが一因であったという。気谷誠「慇懃小説受容史考——占領下の翻訳事情と三島由紀夫 付・フランス文学初訳本目録（18世紀文学・昭和20年～26年）」、『風信』第3号、1991年、22-36頁。
- 21 「デカダンス再生の“毒”、サドの現代性」、『東京大学学生新聞』1956年11月19日号。『全集』1巻、339頁。
- 22 Verdun-L. Saulnier, *La Littérature française du siècle philosophique (1715-1802)*, Presses universitaires de France, coll. « Que sais-je ? », 1943.

- 23 戦後の洋書の入手については当時の状況を仔細に検証する必要がある。1950年の民間貿易の再開によって海外の図書雑誌が輸入されるようになるが、丸善はそれ以前から大使館経由で仏語洋書を輸入しており、その金額は1949年のみで625万円分にのぼる。丸善株式会社編『丸善百年史』下巻、丸善、1981年、1195頁。
- 24 『新潮日本文学アルバム 澁澤龍彦』新潮社、1993年、27頁。
- 25 前掲『東京大学百年史 通史三』、296頁。
- 26 同上。
- 27 同上、283頁。なお英語英文学は入学定員7人に対して志願者28（入学許可者16）、独語独文学は入学定員5に対して志願者17（入学許可者9）とある。選抜は筆記試験、口述試験、出身学校の成績及び身体検査により、4月24日から28日まで各研究科ごとに試験が行われ、試験科目は外国語・専門科目の両分野であった。合学者の発表は5月2日前後、入学式は5月11日で、学部入学者の入学式より1ヶ月遅れていた。
- 28 1953年8月17日の文部省令により、旧制大学院は旧制学部が最終卒業生を出した翌年度から6年間を経過した日まで存続すると定められたが、その後1961年度末まで延期された。東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史 資料三』東京大学出版会、1986年、50-51頁、297頁。
- 29 『全集』別巻2、201頁。江藤は慶應義塾大学文学部、篠田は東京大学文学部英文科の出身。
- 30 大江健三郎『日本現代のユマニスト 渡辺一夫を読む』岩波書店、「岩波セミナーブックス8」、1984年、8-9頁。同書は1983年4月と5月におこなわれた岩波市民セミナーでの6回の講演に基づく。
- 31 ただし、辻邦生によれば、大江が述べるような意識を持った学生は旧制大学時代からすでに存在していた。「それでも私 [=辻] は、当時フランス文学科におられた渡辺一夫氏のもとで文学を学びたかった。私にとっては、フランス文学は二の次で、まず渡辺先生につくことが第一だった。のちに、大学に入ってからわかったことだが、二宮敬も同じように渡辺先生の著作に触れて、フランス文学に入ったのだった。あの頃、多かれ少なかれ、そうした影響を渡辺一夫氏は若い人々に与えていた」（前掲『フランスわが旅』、19-20頁）。時代を経た回想によるバイアスがかかっているとしても、澁澤在学中の東大仏文の一側面として考慮に値する。
- 32 実際には当時の名称は「日本フランス文学会」である。1946年に「フランス文学会」として創立され、1950年に「日本フランス文学会」に改称、1962年6月3日「日本フランス語学会」（1951年「フランス語学会」として創立、翌年改称）と合併して「日本フランス語フランス文学会」が設立された。
- 33 日本フランス文学会『フランス文学研究 1955』、1955年6月5日発行、76頁。「追加」は「名簿訂正」の下にも見られるため、当初の組版のあとに加えたという意味であろうと思われる。
- 34 『全集』別巻2、27頁。1962年5月25日午前の第14回公判の際の発言。
- 35 「昭和27年12月迄」という記述のある新入会員の項に「出口裕弘 東昭26 東京教育大附属高校講師 東京都葛飾区上十葉町1610」とある。日本フランス文学会『フランス文学研究』、1953年3月20日発行、92頁。1965年5月の名簿には出口の名前はない。『フランス語フランス文学研究別冊 学会25年のあゆみ』（1988年6月4日発行）によれば、学会名簿は1962年10月、1965年5月、1968年春、1972年7月、1978年4月、1981年4月、1984年4月、1986年4月に発行されている。今回参照できなかった他の名簿の確認によって、出口、あるいは澁澤の退会の時期はより限定できる可能性がある。

- 36 前掲『フランス語フランス文学研究別冊 学会25年のあゆみ』、18頁。
- 37 サド関連の項目としてほかに「閨房の哲学」があるが、この項目のみ室淳介（1918-2000）が担当している。室はポーヴォワール『サドは有罪か』（新潮社、「一時間文庫」、1954年）の訳者。
- 38 『全集』別巻2巻末。澁澤による『フランス文学辞典』の項目執筆は、本稿以前にも『国文学解釈と教材の研究』29巻10号（特集「幻想文学 夢のモルフォロジー」）所収の論考で指摘されている（千葉宣一「幻想の作家 澁澤龍彦と中井英夫」、116-119頁）。
- 39 18世紀担当の他の編集委員3名は桑原武夫、佐藤文樹、進藤誠一。
- 40 季刊誌『聲』1959年春号（第3号、1959年4月1日発行）、『全集』1巻、435-436頁。
- 41 『全集』1巻、492頁。
- 42 『全集』8巻、35-73頁。
- 43 日本フランス語フランス文学会『フランス語フランス文学研究』第2巻、1963年、65頁。
- 44 前掲『フランス語フランス文学研究別冊 学会25年のあゆみ』、68-72頁。
- 45 種村季弘・出口裕弘「澁澤龍彦の幸福な夢」、河出書房新社編集部編『澁澤龍彦をめぐるエッセイ集成Ⅱ』河出書房新社、1998年、362頁。『ユリイカ』1988年6月臨時増刊号初出。

Shibusawa Tatsuhiko and Academism:

Between old and new school systems

Kensaku KURAKATA

Shibusawa Tatsuhiko (1928-87) is generally considered to have placed himself outside academia. After graduating from high school under the old system, Shibusawa entered the University of Tokyo on his third attempt in 1950. In later years, Shibusawa said he disliked the academic atmosphere of the university. In reality, he went on to graduate school and he joined the Japanese Society of French Literature in 1955, years after leaving the university. At that time, Shibusawa had already started working as a translator, and joined under a pen name Shibusawa Tatsuhiko instead of his real name Shibusawa Tatsuo. After that, Shibusawa was a member of the society for more than 10 years. It is thought that the background to joining the academia was the writing of entries in the *Dictionary of French Literature* prepared by the society. Shibusawa wrote three entries related to Sade, that are not included in his *Complete Works*. These entries are considered to be Shibusawa's most "academic" writings. However, due to the process of compiling the dictionary, the possibility of additions by third parties remains.

Shibusawa's friends like Deguchi Yuko, Matsuyama Shuntaro and Tanemura Suehiro entered the University of Tokyo a few years apart, but they did not experience the transitional period of the school system as intensely as Shibusawa did. Such experiences are thought to have led to the formation of Shibusawa's unique position with respect to academia.